



出来心

試し読み

虎と棒鱈の酒徳

予既^ニ沈^三、漬^ニ殷^ヲ紂^ヲ于^ニ酒徳^一矣

(墨子「非攻下第十九」より。)

「おうい。三郎やあい」

酒精が回り切ったへによへによした声で呼ぶのが聞こえて、ム口は台所にいるのを良いことにわざとらしい大きな溜め息を吐いた。エエ、まだ飲むのかエ？

「さぶろー」

「さぶろーやあい。酒えー」

もう呼びつけるとか、用事を言いつけるとか、そんな状態ではない。ただの酔っ払いが酒に飲まれて戯言を口走っているだけだ。だが、行かねば何度でもこれが繰り返される。つたく、しょうのねえ！

「へい、ただいまア！」

怒鳴っておいて、ム口は腹立たしさを灰吹きに雁首を叩き付けることで紛らわそうとしたが、勢いが良すぎたのか尻端折りしたひざ元へ灰がぼおん、と落ちてしまう。

「あっちちち、あっち！ オイオイ、冗談じゃアねエぜ。あっちちち！」

慌てて灰を土間へ叩き落とし、それ以上の延焼から着物を救い出す。バタバタと叩いて火を消したと確信すると、窓の

方へ着物を掲げてみる。焼け焦げた穴がぼっかりと空いていた。

「チヨツ。冬の質草に穴が空いちまった」

一枚きりしかない夏の単衣だ。冬になったら、この単衣で夏の間中預けておいた綿入れを請け出すのだ。だが、流石に穴が空いていては質屋も今度は渋るかも知れない。それでなくとも毎度質入れに行くと、あそこの主人は盛大に口をへの字に曲げて嫌そうな顔をするのだ。

「さぶろーやあ」

「さぶろー」

感傷に浸っている間もなく、座敷からム口を呼ぶ声がする。

「へいへい」

チヨ、ともう一つ舌打ちをしてム口は座敷へ向かった。そこには良い歳をした男が三人、べろんべろんに酔っぱらっていた。上半身はグラグラと揺れて、もうまともに座って居ることも出来ないほどで、目が真っ赤なら顔も真っ赤。手には盃代わりの茶碗が握られて、ふらふらと身体が揺れる度に、大事の酒が零れそうになっていた。

「あー、さぶろおー」

うひゃひゃひゃ、と何が楽しいのだから判らないが、主筋である同心の旦那、河野鯉太郎かわのこい たろうが笑いながらム口を手招く。

「勘弁してくださいよ、三郎じゃありませんて」

どうせ聞こえてはいないだろうと思いつつも一応抗議する。

「なんだ、お主はさぶろーだろうが。さぶろーをさぶろーと

呼んでなにが悪い」

河野がそこだけ妙に真面目腐った口調で言うなり、わはははっ！ と他の二人と一緒に大声で笑った。こうなつてはム口の抗議など、そこいらの小鉢に乗った肴と何ら変わりがない。

小者であるム口が河野に仕え始めて、すぐに三郎と呼ばれるようになった。三郎となつた所以は、河野の幼名が『次郎』だからだ。次郎と聞けば、次男。次男であれば長男が居たであらうと思うのが、恐らく多くの考え方だろう。

その通り、河野家には長男の『太郎』が居た。のっぺりした顔、並みの身長、ぎよろりとした大きな眼の他は平々凡々と言う表現がぴたりとくる河野家の生まれにしては珍しく、眉目秀麗、温厚篤実、六尺(約一八〇センチ)越えの美丈夫で、北町奉行所でも太郎が父の後を継ぐ日を切望していた、と噂されるほどの傑物だった。だが、父の後継として同心のお勤めを控えたある日、突然はやり病に罹り、あつという間に儂くなつてしまった。きつと有能すぎたあまり、仏様に仕えさせよ、とお召しになったのだと言うのが、河野家一族の専らの認識だ。

閑話休題。

ともあれ、太郎、次郎と続く河野家に一人増えたなら、当然ながら名前は『三郎』だろう、と言う謎の理屈でム口は三郎と呼ばれることになった。もちろん、本人は納得していないし、承諾もしていない。だが、いくら抗議しても聞き入れられることはなく、親戚衆にも三郎で通じるのだから、河野

家の面々は一体何を考えているのか、機会があれば問い詰めたいくらいだ。

仕舞いには他の同心やらご近所さんにも『三郎』呼ばわりされる始末で、三郎が本名だと思つている者も居るくらいだ。この前など一度も面識のないはずの同心の女房が使いに来て、対応に出たム口に一言「アラ、あなたが三郎さんね」などと言われて、何をどこから誤解を解いたらいいのかすら判らず、大層閉口した。

ム口が自らの境遇を振り返つてそれを嘆く間も主とその幼馴染たちが、酔いに任せていきなり詩吟を唸りだしたり、やたらと酌を強要したり、三郎三郎と喧しい。三郎じゃねえんだよ！ と心の中で悪態を吐きながら、ム口は空いた彼らの茶碗に酒を注いで、逃げ出すように台所へ戻った。

「つたく、冗談じゃアねえぜ」
下げてきた酒器やら皿やらをぶちまけて割つてしまいたい怒りの衝動をどうにか堪えると、煙草を吸いつけてイライラと煙を吹き出した。

ム口の前身はケチな盗人だ。

今はその盗みを働いていた罪を見逃してもらうために、北町奉行所の同心、河野鯉太郎の手下を勤めている。ぎよろりとした眼のその男は今一緒に酒に吞まれている、背の小さな長瀬、逆に初めての家の鴨居に必ず額をぶつける長身の高井

の二人と合わせて、北町の三羽鳥と呼ばれる定町廻り同心だ。

思えば数年前の冬。決して腕のいい盗人ではなかったム口は、喰い詰めた拳句、たまたま家人と思しき老女が出かけたのを目撃した屋敷に入り込んだ。

八丁堀の小さな家は大方何処も町方の組屋敷のはずだ。冷静に考えれば、そんな所へ盗みに入ろうとするなど正気の沙汰ではない。だが、その時のム口の頭の中にはせめての質草、いや、まずは一口の飯でも良いと空腹と疲労で藁にも縋る思いだったのだ。そうして入り込んだ小さな屋敷の台所で、水屋にあった佃煮や煮物、そしてお櫃にあった冷飯でまずは空腹を満たした。

腹一杯になったム口はそのまま屋敷の搜索に取り掛かった。板間に火鉢のある座敷、そして摺り切れていながらもきちんと手入れがされた畳の座敷が二つ。小さな台所に雪隠、狭く日当たりの悪そうな庭には僅かに野菜が植えられている。片方の座敷には小さな仏壇があり、何度も洗い張りを繰り返し、継ぎを当てて丁寧に着た男物と女物の着物が二三枚、行李に入れられていた。部屋には長年使い込んだ裁縫箱と風呂敷に包まれたこちらも継ぎ接ぎの袴があった。もう片方の座敷も似たようなもので、長く着て継ぎが当たり、てかてかに摺り切れて光っている男物の古い着物があった。座敷の隅には空の刀掛けがあり、帳面と貸し本が二冊文机の上に乗せられていた。

「チヨ、しけた町方もあったもんだぜ」

ム口は留守を見て取って、ぶつくさと声に出して愚痴をこ

ぼした。さつきまでは着物の一枚でも良いと思っていたが、腹が満たされると、途端に欲が出た。こんな古い着物では大した金にはならない。他に何かないか。

今思えば、腹が満たせたのだ。それだけでも良しとしてさつさと出て行くべきだったのだ。八丁堀のケチな町方の小さな屋敷なんぞで余計な欲を出しさえしなければ、今のような境遇にはなっていなかっただろう。

押入れをひっくり返したり、行李の底を浚って金目のものが仕舞つてあるのではないか、と未練がましく探している最中に、ギシギシと板の間を踏む音がした。腕が悪くとも流石に泥棒稼業。この音を聞き逃しては今まで命永らえるワケもない。

さつと狭い縁側へ出ると、腰の後ろに差し込んでおいたボロ布の包みから錆びた庖丁を取り出す。盛大に錆が浮いて、刃があるかも既に怪しいモノだ。研ごうとしたら、そのまま折れてしまいかもしれない。だが、何も獲物がないよりはマシだ。そうして小指を唾で濡らすと継ぎ接ぎの障子にのぞき穴を空けた。

「届け物を忘れるとは。まったく、次郎が袴なんぞ忘れるから」

ぶつぶつと文句を言いながら座敷に入ってきたのは、さつき出かけるのを見かけた老女だ。忘れ物をして帰って来たらしい。

「まあっ！」

座敷に着物やら布団やらがぶち撒けられたのを見て、老女

が叫び声を上げた。

「次郎！ これ、次郎！ お前帰っておいでかい？ まったく、こんな探し方がありませんか！ 何でもかんでも引っ張り出して、これじゃあ探すよりも仕舞う方が大変じゃありませんか！ 聞いていますのですかっ!?」

老女の頭には泥棒と言う考えはないんだろう。根っからの町方の奥方ではそれも致し方ないかもしれない。

「まったくもう！ お前は本当に小さな頃から、何事もやりっぱなし、放りっぱなしで。これで本当にお勤めが勤まっているのやら。庭の木に鳥小屋を掛けるなんぞと云いだして始めたは良いものの、板は切りかけ、道具は出しっぱなしで次の日には放り出したし。往来物を始めた時も一時も落ち着いていなくて。きちんと座ってまともに文字を書けるようになるまで、三年も掛かって母は何度心配したことか」

次から次へと文句を言いながら、ムロが引っ掻き回した着物を老母が畳み始める。息子とやらはムロのせいで濡れ衣を着せられて、流石にそこまで、と気の毒になるほど文句を言われている。まあ、本人がこの場にいるわけではないから、そんなことを思う必要もないのだが。

「ち」

ムロは小さく舌打ちをする。腹はくちくなくなったが、まだ金目の物を何一つ持ち出してない。大した質草ではなからうが、手ぶらも癪だ。どうせなら、邪魔な老女を片付けてしまおうか。ごくりと唾を呑んで、ボロ庖丁をぎゅ、と握る。

「それは止めておいた方が賢明だぞ」

「うわあっ！」

突然、自分の考えを読んだような声が背後から掛かって、ムロは飛び上がるほどに驚いた。比喩ではなく、飛び跳ねた心臓が口から出るほどの衝撃だ。人の家に忍び入っていると言うのに、思わず叫び声が出た。

「だっ……」

誰だ、と誰何しようとした目の前に、むき出しの刀身が突きつけられている。ひ、と思わず息を呑んだ。なまくらや竹光なんてちゃちなものではない。冴え冴えとした冷たい光が、研ぎあげられた刀身に宿っている。これはすっぱり切れる本物だ、と本能が囁いた。

「その素っ首、今すぐ胴体と永の別れになりたいか？」

目の前の切っ先のきらめきとその言葉に、必死で首を振った。冗談じゃアねエ！ 確かに自分はケチな泥棒だが、こんな何もねエケチな家で何も盗らねえのに、死にまうなんてそんなことがあっていいものかエ。

「ケチな泥棒風情だからだ」

再びムロの心を読んだように冷たい言葉が降った。思わず刀の持ち主の顔を見上げる。ぎよろりとした目が特徴的な男が、厳しい顔でムロを見おろしていた。

「お前の命は儂が手にある」

「こ、殺したきや、すっぱり殺しやがれ」

ムロは震える声でやつとそれだけを言った。何も望んで「ケチな泥棒風情」になったワケではない。だがある意味今の姿は自業自得だとも知っていた。生きていても何か御大層な目

* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: @nedocoya4pr